

後 記

コロナ禍3年目の今年度、第7波、第8波と大きな感染拡大のうねりに見舞われつつも、本学は活動制限のレベルを上げることなく、少しずつ対面での授業や課外活動を再開する方向へと進みました。後期には教室定員を定期試験と同様(約3分の2)に戻し、マスクをしながらではありますが、グループワークやディスカッションができる状態になっています。活動制限が緩やかな分、感染者や濃厚接触者は以前より増えていますが、若者や子どもの成長にとって、人と人との直接的な関わりがいかに大切かが再認識され、社会の目が学生に対して以前より寛容になったのは喜ばしいことです。

学生相談室の活動も、マスク着用のルールと、飲食を伴うプログラムを避けるなどの基本的な感染防止対策以外は、平常に戻りつつあります。その中で、やはり長期的に自粛を強いられたコロナ禍世代の学生特有の、対面活動への不安や人間関係の悩みを訴える相談が持ち込まれることが増えているように感じられます。特にコロナ禍と同時に入学した学年は、まだ地元の友人が頼りである場合も多く、新たな自分の居場所を大学の中に築けていない様子が窺えます。そういった学生たちの成長を支えるうえで、学生相談室の役割はますます大きくなっていると言えるでしょう。

組織体制の面では、今年度は大きな転換点を迎えました。昨年度末の2022年2月24日、大学執行部は、「心理臨床カウンセリングルーム」が担ってきた臨床心理士養成の役割が終了し、「学生相談室」が新設予定の学生支援機構に移管される方針となったことを踏まえ、2022年度末をもってカウンセリングセンターを廃止することを決定しました。1997年に設置され、阪神・淡路大震災後の心のケアへの社会的関心の高まりとともに、全国でも類も見ない充実した設備とスタッフによって展開されてきたカウンセリングセンターの25年の活動に終止符が打たれることになったのです。2023年度からは、学生相談室は「学生支援機構」の下に設置される「学生相談センター」の下位組織として、YOUステーション(障がい学生への修学支援室)と並んで配置され、活動を開始することになります。今年度はその準備に向けたタスクフォースの会議が何度も重ねられました。

学生相談室が発行してきた紀要は今年で30号となります。実践の成果を研究と報告という形で発信していくこの活動は、改組後も大切に続けていきたいと思えます。本号に、ご講演の記録掲載を快諾してくださった杉江征先生に感謝申し上げます。論文は、コロナ禍の多忙な状況にもかかわらず、久しぶりに4本掲載することができました。ご高覧のうえ、忌憚のないご意見・ご感想をいただけましたら幸いです。

末尾になりますが、学生相談室の多岐にわたる活動を日々支え、運営においてバックアップしてくださったカウンセリングセンター・人間科学研究所事務室の三原薫課長、田中美穂さん、鈴木さえ子さん、に御礼申し上げます。また、学生相談室の活動に理解とご協力をいただいている学内外の関係の皆様にも、心より感謝を申し上げます。

2023年1月17日

(スタッフを代表して) 高石 恭子